



【第二夜】

ブラームス：クラリネット三重奏曲 より 第1楽章（ヴィオラ版）

ブラームスは、1890年夏に完成した「弦楽五重奏曲 第2番」を最後に引退を決意していたが、クラリネットの名手リヒャルト・ミュールフェルトとの出会いをきっかけに、再び創作意欲を取り戻し、クラリネット室内楽の名品を立て続けに発表した。本作はそのなかでもっとも早くに書かれたもので、クラリネットのパートは作曲家自身の指示により、ヴィオラでも演奏される。第1楽章ではチェロによる愁いに満ちた第1主題が現れ、それをヴィオラが受け継ぎ、緩急をつけながらドラマティックに展開していく。

シューベルト：八重奏曲

1824年にクラリネットの名手トロイヤー伯爵の依頼で作曲。伯爵は当時ウィーンで評判だった「ベートーヴェンの七重奏曲に匹敵する作品」を望んだという。こうして成立した本作は、編成こそヴァイオリンが追加されているものの、楽章構成など様々な点でベートーヴェンの七重奏曲を下敷きになっている。しかしシューベルトは、そこに抒情あふれる旋律を織り込み、交響曲を見据えたスケールの大きな響きを追求している。

全6楽章からなり、第1楽章は序奏を伴うソナタ形式。主題には自作の歌曲（「さすらい人」）を援用し、シューベルトらしい温かみを感じられる。第2楽章アダージョではクラリネットが叙情的な旋律を奏でる。初演ではトロイヤー伯爵がクラリネットを担当した。第3楽章は力強く活気あふれるアレグロ・ヴィヴァーチェ。トリオでは気分を変えて、優しい雰囲気満たされる。第4楽章アンダンテの主題は自作のジグシュピールから採られており、8つの変奏とコーダが続く。第5楽章は穏やかな舞曲調の主題によるメヌエット。第6楽章は、一転して嵐を予感させるような低弦のトレモロによる序奏で始まる。主部に入ると、トリルに飾られた第1主題とクラリネットによる第2主題とが躍動感に満ちた世界をつくり、目まぐるしい転調を繰り返しながら盛り上がる。展開部を経て、再現部のあと再び序奏の暗い影がよぎるが、最後は明るさを取り戻し、快活に締めくくる。